

思  
考  
の  
隙  
景

連載173  
美術批評家ゾラの軌跡「印象派の終焉」の著者・リチャード・シフの来日にちなんで  
世代間の遣り取りと隙間とに育まれる「光」

印象派の画家、カミーユ・ピサロは先輩格のエドゥアール・マネについて、こんな言葉を残している。「マネにはかなわない。あの男は黒さえ光にしてしまうのだから」。落選者マネを賞賛して鑿聲を買ったのは駆け出しの批評家エミール・ゾラだが、ゾラには絵は分からないというのが、当時の世評だった。いかにも審美眼の「解像度」は低かろうが、だからこそというべきか、ゾラにはこれまた黒に光を与えるだけのジャーナリスト的才覚、鋭利な修辞の輝きがあった。そのゾラが「美術批評はマイルドではだめだ。嫌いなものは嫌いといわねば」と注進に及んだ相手が、親友のテオドール・デュレ。だがカスタニヤリやデュレがバルビゾン派を自然主義者 naturalistes と呼んだのを流用し、クロード・ベルナルらの実験科学精神で擬装してみせたのが、「自然主義文学」の語源だったはず。

そのゾラは1860年代後半にはピサロを grand mal-adroit monsieur 「大不器用な旦那」と呼んで賞賛した(石谷治寛)が、文名も上がった70年代末、ロシア語出版の文藝記事でマネは「眼高手低」、印象派は「吃るばかり」との批判を加えて、物議を醸す。印象派の「解像度」が向上しないのに苛立った——それがシフ教授の解釈だ。竹馬の友だったポール・セザンヌとはゾラの『作品』(1886)公表ゆえに決裂した、とのジョン・リウォルドによる仮説＝神話は、近年覆された。両者にその後も文通のあった証拠が発見されたからだ(\*)。とはいえ晩年の大文豪ゾラには、セザンヌは「流産した天才の断片」に終わった。そのセザンヌをモーリス・ドニが「不器用」gaucherieなプリミティヴ派の衣鉢を継ぐ「エクススの巨匠」に祭り上げるのは、20世紀初頭。だが1902年に没するゾラは、セザンヌ没後の栄光を知らない。

ドレフェス事件後、晩年のゾラは社会主義に傾倒したが、その没後の顕彰を担った「人権同盟」の関係者は、殊更ゾラの政治的なengagementを強調した(寺田寅彦)。だがゾラ友の会副

会長に指名された先述の老デュレは、コミュニケーションの醜聞からクールベを復権するため非社会主義的「純粹藝術家」たる「写実主義者」像を創建した張本人だった筈。「人権派」ゾラ像越しに、非政治的な「藝術の自律」(P・フルデュール)観が遡及的に確立する。それがModernism生成期の抑圧＝昇華の絡繰だった。

ゾラの美術批評が、思想的・世代的に敵対する詩人ボードレールに密かに負っていたことは、吉田典子も指摘する通り。私見ではデュレもまた敵方の保守派美術批評家ポール・マンツの「ケバケバ」bariolageという悪口を賛辞へと転倒する詭弁で、マネ擁護の論陣を張っていた。「自然主義」作家ゾラは実際には精神分析家顔負けの象徴主義者だった。同様に批評の実態もまた教科書的な流派交替の図式を裏切る。ポール・ゴーガン認知に尽力した批評家シャルル・モリスはデュレの『マネ伝』を評してこう綴る。「マネは鎖の連鎖の魔法の環だ。そこで過去と未来とが邂逅してひとつの輝きを放つ」と(1906)。

けだし乖離した世代間の価値観の齟齬と擦過傷とを熱源に、「素朴さ」naïvtéの顕現たる modernité (ボードレール)はmodernism (グリーンバーグ)へと変態を遂げてゆく。従来の「画題」 sujet を脱した「現代生活」が定型 formule に嵌り「手法」 technique と化し、それとは裏腹に「不器用さ」 mal-adresse の「魅惑」や「優美なる強張り」raideurs élégantes は画面の物質性へと実体変化を閲す。過去の「醜聞」は未来の「栄光」へと脱皮し、かくして未熟だったはずの「黒」は「光」を帯びるに至った。

※ Paul Cézanne, Émile Zola, Lettres croisées (1858-1887) éd. & préface d'Henri Mitterand, Paris : Gallimard, 2016. 「ゾラ的美術批評を再考する」京都工芸繊維大学、2016年12月17日会場での筆者の即興のコメントを採録する。招聘者 Richard Shiff、主催者の永井隆則教授、登壇者の皆様にご礼申し上げます。

図書  
新刊  
139  
2017  
2月11日  
3290号  
8面

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美

13